

骨董集と脚下録



特279-190



1200501132073

279

90

0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 7 | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5

始



特279
190

骨董集上編下之卷 後

江戸

醒齋輯



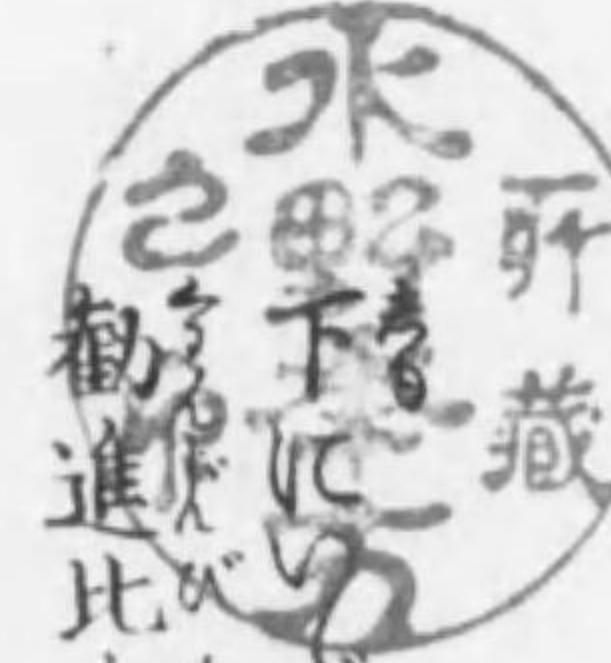
軒藏

○勧進比丘尼繪解

東海道名所記

萬治中印本

卷二云



水田下にござせる古画。その風林をりて時代を考へる。寛永の比嵯ケ居りの處。

勧進比丘尼の繪解也。体みぞあるべし。

〔このところ。比丘尼の伊勢熊野にまよひ。行をとめしよ。その女子みゆ伊勢

熊野よまと。との故。よ熊野比丘尼と名づく。其中よ声く。哥をうひける

あゆのゆりこ。うひく。勧進一タリ。その女子みゆ哥をうひく。よく熊野
の絵と名づき。地ちく極余とて六道乃ゆり絵を絵よりきて。絵とたをいは。
れくあくねもまん女房達へまさにまよひ。説美うんどうもきく事あらねば。
後世をもくぬ人のために。比丘尼のうまれと。がくわうきゆよかたりりきる。
りう乃る。うらううううう。うあせ作勢するまのれど。行をもせど。中・
界・旅・と

すもあらど。哥をかんくうとひえ。とあり。かれば昔の勧進比丘尼ハ地獄極樂の繪卷をひいた人よさへきへ絵解しと。仏法をもてめたり。下の古画の体を見るよ。寛永の比よりてこれを畳へ。かの絵卷の手よ持てる斗玉より。比丘尼二人むろひ居て。絵解の言小節をつけ。抱子をうへてうひ一ふやとか不^レ。日次紀事延宝貞享の二月の修^ム儀俗^ハ彼岸中專作^ス仏事民間^{ミシナカン}請熊野比丘尼使^ハ説^ハ極樂地獄^ヲ是謂^ハ掲^ハ画^エ。とれハ延宝貞享

の比^ハ其^ハアリハんか。○鹿道通鑑^{ヨリ}勸進聖職人哥合^{天文六年四月}前のあとす小絵解とゆふ者あり。その圖をつくよ。俗体^ハ鳥帽子小素襖^を著^ハ。琵琶をひいた杖^ハさきよ雉の尾^をつりだを持^ハ。れがまくよ。絵を杖^ハさきよいのとさう^ハ作り^ハ。あらわす所あればす。又今^ハは^{シテ}藏和讃^をとく^ハて。勸進ちうも^ハの遺意^{みやめ}。

勸進聖職人哥合^{天文六年四月}前のあとす小絵解とゆふ者あり。その圖をつくよ。俗体^ハ鳥帽子小素襖^を著^ハ。琵琶をひいた杖^ハさきよ雉の尾^をつりだを持^ハ。れがまくよ。絵を杖^ハさきよいのとさう^ハ作り^ハ。あらわす所あればす。又今^ハは^{シテ}藏和讃^をとく^ハて。勸進ちうも^ハの遺意^{みやめ}。

○端午の茅巻馬

骨董上編^{下之後}

画卷の如きをあけり 絵解の花の哥小 へん不^ハや絵^ハうひまく^ハあ 花の紐^ハうとうとく^ハの我^ハまく^ハと 旧述懐の哥^ハ「絵^ハかく^ハ琵琶^ハ先^ハ我^ハを^ハこ^ハうき^ハあ^ハん^ハた^ハめ^ハう^ハき^ハう^ハれ 判^ハの詞^ハ考^ハふ^ハ小^ハ官^ハ軍^ハお^ハな^ハ今^ハ按^ハす^ハ秦^ハ覺^ハ法^ハ印^ハ八^ハ代^ハ後^ハ鳥^ハ羽^ハ院^ハの御^ハ時^ハ文^ハ治^ハ建^ハ久^ハの比^ハの^ハ人^ハ當時^ハ五月五日^ハ茅^ハり^ハ馬^ハ作^ハり^ハ車^ハの^ハり^ハす^ハべ^ハ。日本歲時記^{貞享五刻} 一

著聞集 卷草木部^ハ云 泰覺法印^ハ五月五日^ハ人の^ハ许^ハ菖蒲^ハを^ハほ^ハる^ハと^ハそ 先板^ハ引^ハき^ハる^ハ。アリ^ハあやめの^ハあち^ハを^ハかぶ^ハ。ちまき^ハ馬^ハを^ハやひ^ハの^ハと^ハそ 嵩木集^ハの^ハちまた馬^ハの^ハ連^ハ昇^ハの^ハ様^ハ 一

○古画勸進比丘尼繪解圖

柳塘館草叢藏

按此圖古今約有百八十年
前官永中御ける
絹を身に着けたる者
七十一番職人冬の
絹を身に着けたる者



き。べー。

○端午の頭巾・袈裟・小人形

〔三〕

之頭巾・袈裟・并・藥玉等物・賣之云。[雍州府志] 貞享三刻 卷之七 小川人一家・端

骨董上編下之後二

今より凡百二三十年前・延宝天和貞享元禄の比。五月五日男児紙のみで造れ
頭巾・袈裟を着。山体の体より立てて挂べ一事あり。〔日次紀事〕延宝五月
五日の條云。以柳木一作大・小・刀・是謂菖蒲刀。男兒横之。
於腰著頭巾・懶山伏脉云。〔雍州府志〕 貞享三刻 卷之七 小川人一家・端
午所用木一刀・或謂菖蒲刀云。又木長刀・木甲・胄・山伏・
之頭巾・袈裟・并・藥玉等物・賣之云。[物語] 享保十一年夏・六七十年
五月の初どきんとかけわら菖蒲刀をうりてあり。それを
子供にて五月四日小子供をすうぶうと附巻し。どきんをかけたどきと
か。菖蒲刀をさし。わらを吹めりく云。とあり。それらをそろひますよ。
そべて下の古画よりとつてあります。今もそれから車されがねば。

○元禄年中の印本

大和耕作繪抄

小所載の圖

藏本



○謂ひ人形のひ、先板の巻よりも、元緑のころはまでもうの、曾と人形と物のめよみれり
人形の制の贋をとるべし。其角ヶ五え集

○後妻打古圖考

四

後妻。和名宇波奈利。

新撰字鏡

日本紀 十三 嫉妬の二字

三

相当打つる

9
12

○後妻打古圖考
四

うらさりとん後妻をひくる古言く
嫌・宇波奈利

日本紀 卷二 嫉妬の二字をうらさり移と訓り。
和名鈔 後妻・和名宇波奈利 新撰字鏡

昔ニ物語 うらさきに室町家の比のうらさきや。相当打とりてうらさきと
とうんうらさり打らむひける。妻を離別と後の妻をむりへよ。其あくべ小うりて前妻あき女どもをたのみ。相当打と催し。まぶ前小後
の妻の方へ使ひをほけと某の日某の時相当打すやくざきとひひす。其日よりされば前妻をうらめとうてあくべり女ども。わめくちもひきのう
をりも。後の妻の方へゆき。臺所うちに入て打まわる。後の妻の方よも。まじた
をためみかきし。うつとどとまことだ。とまことだ。ひかのう。時前妻後妻
の媒妁せし者。者の妻と侍女郎小さしきと。双方の中より。あづりひまなて
かくらぬあり。たゞ人に男をまし。ふる事あらせまづりとす。

○えをね当打の名へいまざ化の筋すじみゆく。

うひきり打の名へうづに物ものつとえたり。

寶物集 治承二年
化十年
六百三十
年也

寶物集 卷二云 村上帝の宣櫻殿の女御芳子と小一條左大臣の御娘打戻うちならふとれりとすと。眼まなこて御覽うけんトドリガ。餘小姑思おもかおもる。九條右大臣師輔の女御を土器の破はすと打給だきひけるとぞ聞きこえし。さて御兄の處原一條殿伊尹堀河殿兼通三條殿兼家三人すゞすゞ。御ごがこまり小成ちうせい縫ぬいひ小りとどらと聞きこえり。増ますての年としの下げ子こざの。後妻ごぜ打うちとうやを

源平盛衰記 卷一云 村上帝の御宇ごうよ。左中將さちゆう。兼家と云人あり。北方きたを三人持もたれば異名いみなし。又また三妻みわきと申あつけり。或時此三人の北方一所いっしょより寄合よせあひ。招色まわいろ顕あらわして打合あわせ取合とりあひ。髮はをみづみづ。衣引いひき破はりあひとぞ見苦みにく一いつれれば。中將さちゆう完まつ六借むかとと宿所しゆしょを捨て出給だきね取とうする者ものもあまと。三日まで組合くみあひて息つき

居ゐたり。二人の打合あわせの常つねの事こと也よ。まことに三人されば誰だれを敵かた共ともく。向むかふを敵かたとお合あわせること咲さくけり。云いふ。宝物集ほうぶつしゆと云いふ。と時代じだいもあわせ。かくかく二人の打合あわせの事こと也よ。村上帝むらかみだいの御時ごじの事ことをり。ちづれはうすすり打うちひふか。狂哥端きょうかたん。曾そ呂里狂哥端そりきょうかたんと云いふ。後あと卷二云まこと教月きょうげつ上人じょうじんとそだふといたひ。正ただ圓えんをめぐり塘とう打うち一いつけるが。施せはふのあり。里さとに女房めらこのううあり。ううをあひあけあけをそぞろそぞろる。一ひとの中なかよ女のむむどうどうば牛うしの角つのやぢやぢ木きありまま。

弘安六年
文化十年
五十年也

教月きょうげつと云いふ。此この卷まきは益住法師えきじゅつ弘安六年也よ。

續拾遺集

古柳こりゅう月つき印いん本ほん

卷二

教月きょうげつ上人じょうじんとそだふといたひ。正ただ圓えん

卷二

三國傳記さんごくでんき

第三條

三井寺さんゐでら小教月坊法橋こうげつぼうと云いふ。

あん

如法經じふうきょうを書寫しょりすると四十度じゅうど。云いふ。

卷五

三井寺さんゐでら小教月房こうげつぼうと云いふ。中比碩學ちゆうひせきがく有あり。

卷十

三井寺さんゐでら小教月坊法橋こうげつぼうと云いふ。

在ゐのうひきり打うちの哥あ。教月きょうげつのううりううや。哥あのああくくもううきき。ううれらも實じつのひひうう。思おもひ合あわせをべべ。○承久じゆくのみみなな。哥あををみみて金かなたた。清水寺きよみずでらの住す僧そう。東鑑とうかん卷二敬月けいげつ。京月けいげつ清水寺きよみずでら僧そうととあり。承久記じゆくき卷下しも。古柳こりゅう月つき印いん本ほん作つくり。右うの教月きょうげつとと別べつく。又また狂哥きょうかよよ名なだだかか。一いつ曉月あけつき。

坊も別人。これら詔のとまくの
をうたひりとひり混へて。

藝の謡

よ

「あら恨めや。今打ぢかうひひまじ。あら嘆きや。か東の
御息所わどちん身うそ。うひうり打のちん振廻りうそ。車のひへき。唯が
しめーありゆい。いやいふりふとも今打ぢかうひまじ。と枕よ立。うりもすと
打じ。」は文を考うる。貴きれ身うそ。下ぎの女のじく。うひ打を一ゆり。ちらまきとゆく。
とりみ義よきとゆり。打をほく。室門扇のうそ。うひ打を一ゆり。おとせの相当打
のうそ。うひ打を一ゆり。うひ打を一ゆり。うひ打を一ゆり。うひ打を一ゆり。うひ打を一ゆり。當時

又 錄輸の謡

小

「りをく食をどらんくと。ありとうりあげ後妻の髪をす
からまひ。打やうの山。夢うつとゆワツがるうきをす。云云
【靈】うれもせ

又 三山の謡

小

「み生び余所す。移くまき。花のうひあらうんとそ。かつらの
たちえを折持て。中畠。移くまねくうひありと。打ちじうちらん。云云
【靈】うれもせ
されいかつことりくる女の死靈。されば近むの怪談の草紙。とくにうひ打を生
れかづか死がゆるのあらまことぢく。ハラレのうひりをきとくらのけくをりうべー。○あるま
御諸の發もほけ白うひゆうひよりとづきと怨靈の事とぞ。がむやう。そゆらをす
ユカハラヒ。うひ打の代とまきもくもを左よ奉。

嵐山集

玉女四撰明暦二刻

沙金袋

明暦万治ノヒ

解脣

明暦ノヒ

新発

万治三撰寛文七刻

前句

きぬの妻のうひあり打う植乃音

林逸節用集

明應コトノハサウキ

言辭部

嫁打

書言字考

嫁歎

貞徳

〔引〕

下

下ひ摸

しゆせん古画の原本に附たる考へがきて。圓女慶長年中わづ
かうも二百年以來。わる風俗のあらためたり。當時月のまゝよえ
さゆをわざる絵。うべー。とくらうもあ。べー。今接ひ。うく
○於圓哥舞妓古圖考

下ひ摸しゆせん古画の原本に附たる考へがきて。圓女慶長年中わづ
かうも二百年以來。わる風俗のあらためたり。當時月のまゝよえ
さゆをわざる絵。うべー。とくらうもあ。べー。今接ひ。うく
羅山先生文集 卷五十六 云々 今之歌舞妓。非古之歌舞妓也。若夫

打後古の妻画



教坊梨園。及小蠻。樊素之流。所謂古之歌舞妓也。男
服一女一服。女服一男。斷髮爲男髻。橫刀佩囊。云
此國風。今之歌舞。皆習之。云云。
此文下に九二吉無攸休。吉。云云。此文下に九二吉無攸休。吉。云云。

教一坊 梨一園。及 小一蠻。樊一素。之 流一所。謂 古 之 歌 舞 姬 也。男
服二女一服。女 服 男 服。断レ 髮 爲 男 髪。橫レ 刀 佩レ 裳。云 云。男 女
相 トミニカツ ウタヒ カツ。ウタヒ カツ。ウタヒ カツ。ウタヒ カツ。
者。始 ナスコロレ。列 トコク。國 都 郡。皆 ナラコレ。習 レ 之 云 云。
野 横 下之巻 云云。此又下にうるいはざる古画也。
龍 飛 紀 略。第 一 云 元 順 宗 至 正 十 三 年 中。
元 主 每 遊 宴 以 官 女 十 人 按 舞 名 爲 天 蠶。舞 首 乘 髮。
數 簪 戴 象 牙 冠。身 被 纓 絡。云 云。近年出雲巫京よりまく。僧夜を
きそて。鉢をうち。佛号を唱へて。始め念佛れ。どうぞひし。その後男の歌舞。東。
刀を横へ歌葉と。俗よめぬきと名づけ。せの風俗。以此裏ぬる。と。惺窩とあ語。
て。胡えの天魔舞。今のかみにうち。似て。身を。行ふ。と。やふれま。

ええ氏披庭記を引く。
天麿天舞のまこと載らず。
そぞろ物語
寛永十八年印
本・杏花園藏

寶永十八年印
木杏花園藏

是を諸人よそぞり。云々^ク
えす。りとまゆらをたる草紙五十
枚二十冊。うれしきのワヒグミ。狂歌
をもんじらそろわ倍と名せん。アレ
あれば。し物倍の作。おへそよの時。
されも又明化。ちりとまより。
京童 明暦四
年印本 卷

えをりる。云々

まゆら。草紙五十
のワ。ひぐさ。狂歌
や。倍と名舟。もんづ
作者へ。まよの時
京童 明暦四 卷

と。このこと。仏早

又力をもてて、四刀の装束をもと哥、弟をもとれをうづれといひす。またとる
云々。東海道名所記。万治年印本。卷六云。むりしく京の歌舞妓の比
あらじへ出雲神子小あくすとひるりの五条河原の橋づめアラス。
千子をどりとりゆすといふ。その後小野の社の東よ舞臺に
ちく念仏をさりよ哥をまぐねり笠小くれちわのとうえをまとい。鳴鐘
を首よりそ笛つゝ小拍子を合せてをがうけり。その時ハ三味線ひみ
まむ。かくて三十郎とひち狹衣脚をまよまうけ。傳助といふのを
かきらひて。三衆縄。まの東のうへ祇園をの町のうへろよ舞基とまく。
まみ。よ舞をども。三十郎が狹衣傳助が糸よりとも。醒云。京中
うれよううまれてえんわもるわしに。六條の領城町より佐渡嶋といひす
とあく。うき女のをまう。四衆川原又舞臺をたて。ひのどの數多出で。
醒云。よ佐渡鴻正吉。あらじくらは。ふたたび。け二召よ筋縄。かくの京童の
舞を。とせり。云々。

見苦しとおなせられても具足の上へいかずされたら。洞窟樹の
あらざと下へまく。かく。旅團が車をほぼきられ。れ感涙を催すとく
云々。

類聚国史
卷四 神祇
部ノ四 伊勢
齋宮ノ條
ニモ此古文
ナ載リセ
タマヘリ。
又日本紀畧
卷六ニモ見

それハ室暦十二年ノ印本モ。寺内に物アレドモ。念佛を首より下だるトモ。を
り。下の右画より下め。されば古説をほくそへ。さる。あらん。はる。わちき。やまゆ
ス。先。と。のん。
○あく諸。召。を参考。モ。ソク。に。どく。べ。ト。ヤ。の。右。画。より。と。よ。あ。れ。ば。慶。長。中。よ。ゆ。け。る。に。が。か。た
の。う。ゆ。カ。を。今。日。の。ま。ぐ。に。う。る。う。が。ら。と。あ。も。り。れ。て。あ。く。ぬ。り。い。の。ま。み。ざ。ー。い。こ。め。づ。ら。ふ。う。り。
あ。く。歎。を。き。り。め。き。と。目。を。の。き。あ。く。う。き。ど。か。と。と。に。贊。朴。の。右。風。を。う。る。に。た。ま。す。
ち。に。わ。よ。い。す。の。ま。ぐ。を。あ。く。ん。よ。ア。
う。た。経。よ。あ。く。物。あ。ト。ゆ。ト。
日本後紀 八之卷 よ云。桓 武 天 皇 延暦十八年秋七月癸卯
十九葉 己酉停伊勢齋宮新嘗會但以歌舜伎供九月
祭一舞。と哥命女岐と名づけ。も。う。あ。る。う。と。ど。り。一。
之にかか。き。ハ。曲。舞。下。妙。の。舞。風。よ。く。ん。と。あ。も。ひ。よ。う。と。を。ち。昏。ど。も。に。え。あ。く。り。て。考。あ。る。所。
れど。丈。あ。か。れ。ば。あ。る。よ。ん。ぶ。の。が。難。劇。考。よ。う。く。あ。く。ま。き。

十九葉
之卷
云。桓武天皇延暦十八年秋七月癸卯
日。停伊勢齋宮新嘗會。但以歌聲伎供九月。
秋舞伎。いづみ。ひ。神事。よもぐる名あり。またりと女巫。されば神事。わざり。
哥奴妓と名づけり。もくろうらとぞりし。
さきの変風。うんとあもひよくとを。古唇。どもにえあくりて考。ある。所とぞり。
うかれ巴。あらまく。がのう難劇考。よくらくちよき。
○糸縷とどまる。かう。六

頬聚回文
の奇舜伎
へ松屋夷
もよ
え出く
俳諧哥語
よゆ

東海道名所記 よ 三十郎がねえ傳めが系よりとも、家中うちれよううり
まされて、なんぬちるやどに云々とありと、今案あらよ。哥姦、妓事始ニ云
昔は小出やう札の文小いわく。
候ふ月八日、北野、名古屋山左衛門在所、家捨女之
不作成を一覽、念望之人、頑來見。

とある。もじりとくらへん。在不のいと、うる件。
かは極小書てはよ歩き上とまびたるさうがとちられたり。右の侍を
かがき伊吹とありひまがくべくらががきはめりもる。娘。正徳。享保のころか
人きり。

又 同書 卷一 哥 薙 物 あ似名代のつに。糸 捻 権 三郎。と云名えたり。
+ 一 謂 諧 師 紀 逸 ゲたそれの日記 小糸縫 権二郎。女形の娘めのこりとあり。
けふとくらり権二郎とゆる。かの侍吹がりとくらりをはくへ。老れ。これらを
りよ。糸縫とゆる。じゆく名まくわじゆく。がくよとをありり。

○慶長年中の繪於國哥舞妓圖

原本梅龍園藏
摸木著作堂藏

○此繪は三絵の
東海道名所記
「その時へ二体織り
うきとく」といふ
茶会と。
○うちかをあちへうけん
をあびへうろの同登ふ
えだ。ゆめりさる
かうそる伴あるべし。
うたんをあぐるの
あきら。先板の巻も
うねりがごく。
○侍ふよ尻かりだん
うにぎ男ふ拾へたる
従うべ。
羅山先生文集

脇脣を腰へ一髪を
断て男の唇とく
かをうとうとく裏を
ひぶとあくに筋合を。

又・
毛物籠



○羅山先生文集小
男の女脣を脇へと
あくをもりへばけ女ふ
抜へたりかこがきよ
と三十郎うべへ。うら
ひもをひもふととの
ひもをひもふととの
ハ前よくかどくへ。
ハ前よくかどくへ。

○羅山先生文集
とじるみゆくあ
り。京童
たれ
哥布始
たれ
の親より。そこハの
紋つけたらもめくらし
遊糸の勢い。先板の巻
よつす。うどる音あり。
ふくやもうきよ
がりあり。



○かう髪を假えを着たりと云ふ。かねんづきどりの作るべし。

○腰帶はかわらぬ。天製腰带と云ふ。りわく腰带よりうらのうらと云ふ。

○武旗をスレバ。慶長年中より今

文化十年までがも二百十餘年のひの貴族の風俗。目のまへ

ようみて、うつにまへ

きをみるこちせし。どうぐた物をあく。

○見えあるべし。
○見えの人男女ともに
うきりして、りそをあ
ゆいなど。人目をあ
ふ化へかるゆえに
もるをうかれがよし。
むづの質直の
風俗をとれらるも
うべし。前よりう
きく。あく監をまき
ぬきだれことまへに
算があり。

○会ひ人をうけと
うべし。足袋をもじ
さぬよりうされり。先
枝の巻よりうるゆ
うにびられり。京童

○うふ念珠をうひよ
かりうる男のうがま
三十郎うべし。

○うのうらもども
古春は年合もども
て。団の真きもども



○武旗をスレバ。
慶長年中より今
文化十年までがも二
百十餘年のひの貴
族の風俗。目のまへ
ようみて、うつにまへ
きをみるこちせし。ど
うぐた物をあく。

○右の繪の詞書

おまなま
のやうも
れども
うにかく
べし

いはあひれまくらを
きこゑてわへり
とちとす今れやとよ
さくさくせうすほ
てせせとほせ
みちあひてしを
かひ
れりあひ月じよ
ほくみちい海かてだ
そとよ風よ
もあひくさんか
トアキシヤ
カスハシのう
ねた
ミカムタリヒテ
ウキのうが
よまくわらうと
みる
すにけむじゆふと

○酸醬を吹かしと奉さ

〔七〕

今世の童のやづきと吹き事と

〔八〕

うの花の巻。寛弘五年の所よ。宮ハテへのまほほ稚小れりります。云。一條院の

院。

后上東門

院。

たゞの内乃佛年らむちもくとからをかへすぞれり。あはれ。さうにあね。心りとかひたまを。まくやを残す。云。あはれ志ろくうえ。あはれ。酸醬。あはれづきうどを。あはれぬ。うめく。もゑたらんやうみ。ぞ。ええまや。おはせ。とあり。當時あはげたをうなまうをゆめありければ。そ。あたかくらめそとくかきけあ。り。の。宮中せんじとくまきに。うすも。れを。り。そ。あそばれ。し。かや。寛弘五年。う。今文化十年。う。が。う。そ。八百六年。う。が。る。後あくくん。う。も。あ。か。か。し。う。う。あり。ひ。も。う。ね。り。そ。り。原。底。物。講。卷。玉。く。の。う。あ。を。の。つ。る。あ。」酸醬。う。く。づ。く。と。う。り。入。め。や。う。ふ。く。ら。う。み。そ。髪。の。か。れ。る。ひ。あ。く。う。う。う。お。不。也。と。あり。う。う。吹。と。う。あ。れ。ど。葉。花。物。語。の。う。う。バ。よ。あり。む。き。ハ。い。く。

柳草紙

〔九〕

異本。小。れ。わ。き。よ。こ。う。れ。物。や。づ。き。と。あり。わ。づ。き。の。食。物。よ。り。あ。く。ひ。ば。吹。う。を。耕。う。ざ。ん。大。き。ふ。そ。う。れ。物。よ。り。

う。ふ。ま。く。や。の。け。う。二。流。布。の。不。ふ。れ。し。と。あ。わ。れ。

本草綱目 卷十 酸醬水の條下・主治又云「食」之除熱治黃病尤
益 小兒 附方又云酸醬實丸・治婦人胎熱難產

○小兒をあやしよハアとりよると

〔凡〕

古今著聞集

卷十 いのふ
七 怨異部。不け物又曰をあれたらるをりと脩よ。

門をこじりてあひ。どするやどに家の到よあまく声して。やあとりひく。あやれそろーくてあひ。云々。う。一。き。る。す。だ。ら。せ。ん。あ。り。と。り。よ。え云。と。え。たり。を。あ。と。り。る。は。あ。よ。く。ら。ふ。声。う。今。小。兒。よ。び。う。ひ。ハ。ア。と。り。よ。え云。大。よ。ワ。う。ふ。の。を。す。な。と。う。作。を。ま。よ。び。地。藏。の。法。樂。よ。せ。ら。ほ。う。始。れ。り。と

り。あ。ひ。ま。き。

今童持べよ子。う。く。と。り。の。車。を。め。り。それ。り。と。古。れ。車。古。れ。比。丘。女。と
ゆ。り。そ。の。原。ハ。惠。心。僧。都。經。文。の。意。を。と。り。地。藏。菩。薩。罪。人。を。う。ひ。い。る。あ。ふ
を。獄。卒。取。か。さん。と。う。作。を。ま。よ。び。地。藏。の。法。樂。よ。せ。ら。ほ。う。始。れ。り。と

三國傳記 卷第八 第二十六條 云 「童部の戲小・比丘女とり事」
惠心僧都閻羅天子故志王經を見て其心を得て始まを給ひけり夫
地藏菩薩へ中右遂津の方便閻王廳庭の利益等在之先中右遂
津の利益者獄卒罪人を引卒して還時戒問樹と云木の本よ
地藏菩薩罪人を乞給中累獄卒無レカ奉レ与レ又無縁の衆
生をバ中累押奪取給也時又獄卒等罪人を取返さんと云可取
ト比丘比丘尼優婆塞優婆夷と云此時地藏菩薩云上見
頗梨鏡下見頗梨鏡と云意へ淨頗梨鏡より浮る罪業の衆生也
云々若又一善力や有らん頗梨鏡の上をも能く見ると云義也爰
き以て僧都地藏の悲願を感悅の餘りよ般若院の地藏の前よ參て
此經を被レ講後児共童部を多集て地藏與獄卒取ん不被取と云
所を地藏法樂の為よ両方衆を分て李び踊り給り始め取

比丘比丘尼優婆塞優婆夷と云けるを能も不知童部共早く
云んとちる程よ。取てウヒフクメと云ける也。是深き意有て薩埵の内
證小稱故よ。地藏の法樂より是を取んとも。されば吉野の天河の辨
方天の御前も。老耄自髡の山固よ至らすでも。向くヒフクメをそ
法樂也。是本地藏菩薩も御座故也。

それが立里甚ひの子とあくへは比丘寺よりひび毎年永享三年にあれらのあれい
のとある。承喜三年より今文化十年までがまと三百八十三年とてよ。重の是ひよ。
あたひのちれりあくもその廟を
ちぬればいつれありうりそあかくろ。

塩尻 卷十 小云 和州天川牛大天の鬼夜よ入て小鬼をあらめ並べて歩行せ
しむ鬼の出立たる民と幕内よ盡て走り出でゆの小鬼をさらんとまよそ。
法師も小児も口音よ文を唱へてそれを追ふ。是まゆ鬼走りの変風う。或云
彼唱所の文は薩羅天子経の文う。牛天の牛地を地名薩摩と唱へ。彼經
エ此行法ありといふ。わゆる今もう凡百年をす前より今もは察あらぬ。○塩尻の卷の
いせのまゝぬ物すれどもぶりわざえ一巻のつとをあらくあらぬまゝ

○ 比比丘女閣

され今あづまも。ふをうる。比丘比近尼と
とりふくらむ。びの原す。比丘比近尼と
りふくらむ。音ほひふくらめとどく。前すゆ
じるらう。惠心院の僧都うりそ。まれ
うれば。りとくうすれり。

日春法華傳記

下の卷よ云

僧都追春秋ヒ十六。

以寛仁元年六月十日

寅時刻承遷化矣。

減後りに二十

五六年来を

長久中ニ

接する物あれバ。

能ともうてたれり。

續本朝往生傳

丁十一

僧都沙門傳

元亨款卷四

實仁え年より
今文化十年まで
計七百九十七年之

○又鬼ワタリとて見を
だらへるまゝねびきる
御子の姿。そのちゑよ
鬼といふ名のあらうん。

物類林呼

卷五云

河内子の鬼りと云を。
東國又出雲邊。肥の長崎
鬼は通雅。三の替鬼
鬼の目かゝのたひとぞ。うりよ
といふ名あり。和漢書ひ似うる
事。

○これの古画よりらむ
三国傳記の文の
あり書きをあらまん
とを今あらまん
ほくまつた。圖





○かくはーあそび

字都保物語

初秋の巻よえ

四

字都保物語 初秋の巻 云 草のうに笛の音の志竹をだらぬあむ
采雀院 1月1日
草笛をくもあたけれ大將がれゆそびをす やんとまえほふ
云 荣花物語 ほぼくをまの巻 長和三年の條 云 きどき
おひひきとえびれど おやどくろほんす ちゆもされば せわれゆそびのやど
も こらげたら こちと それをあらぬとてをも下されたら とめ れらはやく せ
れんがあるべし たひりふと うれど うれしにあらたまきのこもく
書言字考 二 自地藏の三事をめぐれゆそびと訓せらる。自地 すめい そめいの根葉と
ゆき義よしん 実文の比べられをかくれてともいふ。古今夷曲集 實文五年 撰序文
「あいをおりやまか川の阿雲 いよの掉頭 くそ 佐の根 甲 大和のえ興 ま
ほらわふらんま あ

物類称呼 安永四
年撰 卷五
まんが出雲ともかきんじと云相模也。され
見るやうと云。舞倉まいかよそひ。されんがと云。仙基せんきよそひ。されんさるんどりとひ。
醒さけ云。輶わ。石いし。間ま。わく。そ
のれん。されば。されんが。ゆゑ。子の轉語。されんさるん。こ。特とくびの遺言いごんあるべ。

竹取上
転障
古各
多
也

○目 う ごら軒乃雀 十二

今之をの童おび小目あく。或ひりんあらうとらふ事め。そまへ室町
家の比がう。どらのたのすめとひけり。福富の草紙 上の詞書又「アスラ
さがくめう。どらのきのす。らめをぶつら。のまき一やばくで考へ。」とあり。
詳うく。今詞書を案ぞる。めくらとせんもくろ。せうだうのあと
きの古れ詞づくのあく。尻をぬごろ。腰をあう。放屁をあら。小袖を
べぐ。すどく。詞のまし。れるこそ。がやか。室町家の中こうのあとかがゆ。
絶ゆも又ちよががゆる證あ。

○又一休和尚の水鏡

又「目 う ごらく。らまてつひこま。」とりく文

ゆう 水鏡註目無草

卷

上

「

どらくとれたうめくらとがうり。」とりく。

○又目あくとらる名も古れねよアの

酒食論

の

詞書又「

うう。」の視

むそびゆ。酒のあたまへくも。咒師あみ玉のうまへまをまくと。のゆ。バ
あらげたり。どまく。目あく。ちうりきら。ひく。まく。まく。ひく。のゆ。バ

此後卷も室町家の比の物。作者に詳

きく。かく。一條禪間の作すりといふ。

○新編大字小字集

万治三年撰

寛文七年刻

卷十二 雪の中やめく。どらく。あよ。よみ

卷二十 雪のもくや目あく。どらく。雪 乃 中

柳枝 吉綱

うれ万治寛文のころも。めく。あよ。よみ

むれおぐま。目の雀のどらくと云義あるべ。せんあらうと云。目の雀
あきの義うるべ。雀もふるも打ひれておぼす。和訓禁書 云。目乳。見人捕の義
成べ。とらうへたゞく。あらう。○漢籍ども。此の目あくよ似うる事あまくえ
え。名目もあられど。桃苑日涉 卷五。かわく。舉く。今らしがじ。のあられ。かく。

○目 比

今童の戯もく。からみくらと云事もく。ひく。目 う ごらとひけり。

治承四年
ヨリ今文
化十一年
マデ凡
六百三十
四年也

長門本平家物語

卷九

治承四年。清盛入道福原より在て夢よされかぐと。

ふらふあられりる事をりる所よ。入室もまゝワドとこれらをふらふおみ。たゞく
人の目くらべをする。またひよまくまきせど。とよらまくとも。よりる。

日蓮御書錄内

報恩抄の上よ云

建治二年七月

太平記

卷十

建武二年十二月十一日。竹相根竹下合戦

ども云々

二十一日とあり

太平記

卷四

建武二年十二月十一日。

竹相根竹下合戦

膝抜云々

とぞうり。此日は貞和二年の作あらんと

これらをえりて。よらまくらと

の條よ云々

加様」

月くらべて。鎌倉よ集り居らむ叶まし。云々。

異制庭訓往来

正月七日の消息の中に遊戯の名目をみて。月比頭引。

膝抜云々

とぞうり。此日は貞和二年の作あらんと

これらをえりて。よらまくらと

いふ事のりあらうときをあらべ。此事は先板の巻すまうれど。から

くくれば。よらびり。

○宿世焼

田

異制庭訓

拾

藏

後

名寄

著

作

卷三十二

正月十五日。左義

長の燃張りの木を。宅の炉中よ焼。其火よて縁結の餠焼と云事を。童
部共うと。食の脹とすて。品形を肴と具ぞ。云々。とぞうり。これ宿世焼の遺
意す。あらう。縁結のりら焼と肴つゝと。よめとがや。

異制庭訓を貞和二年の攝と決む。とぞうり。今文化十年をも。と四百六八年をも
古事記。そんじてばのりも。のりたとあるべし。
○見世棚

十五

附注本より すまざなれたらする 小櫃のゑもえにとゆまと 植園主人より
上佐日記考證 よかれたらす。されも棚をかまへておりのうれす事のあまむ生る

は日記の買ひぬ。承平五年の紀行さればりとあらわす。承平五年より今文化十九年なり。

通辻子小者
路令構見世棚絹布之類贊菓子有賣買之便様
可被相計也

正月廿一日各之とられば見世棚と云ふ。古壁下學集文安元
時序隨筆卷ニヨ庭訓ハ玄惠法印。元弘四年
見世棚の名えたら。勸進聖判職人哥合
天文六年よりをうも。賣の片

の奇よ「妻は又さうも亦の半車にえをねたまひゆかひう」
の名號あきらう

奇異雜談集

天文中の作也

考へ別よめり 卷二よ云 家めい婦人すゝめ丈
一、二年ひづりすりぬき。ほねよ茶屋のやうだよ居て茶をうぶありそ

奇異雜談集

天文中の作

○見世棚古圖

○見世棚古圖

載る不^シ京四條の町のえせ棚^{タケ}のうぬう。はな
きたの時代、つまびらうからざれども、あやこ文安
宝徳のうのゆとありう考へず。そぞがさくさと
りらう。外百番のうちの松山のうちのうたひ。
此絶巻のことへがきに似^いふ。とくろあく。これを
文安宝徳のねと
もん。



七
庭
の
新

よしとをりて、うりに棚をほじ。胡丸五六を出で、
のたごひをままと
うられよ似たり。
運歩色葉集
天文十六十七年
ゆきの撰
卷四よ見せ棚の名をひざめり。
天正十八年の條よ云
又松原大内神の宮の主。
町十町あらわし。毎日市立て。七產の棚をましまへ。ちかちろめ。ま買ありうり。
とそ百の賣あはよ。まの買わ宵て。群衆集ヒ又云
町へり小屋をうけ。講圓津。
浦この名あをおね本て。賣買市をかうと。或見世棚をましまへ。唐土高糸
の珍物。京塙の絹布をうるもゆり。云々

通志

よひをりてうりに棚をほり。胡丸五六を出で。左
のたゞひをままで。まるあれよ似たり。
運歩色葉集
天文十六十七年
ゆきの撰卷四よ見世棚の名をひざせり。
北條五代記 卷十
ひらうみ
天正十八年の條
よ云
又松原太郎
の宮のま。

卷十
町十町や。らむ。毎日市立て。七度の棚をわまへ。ちやかとるわ。も買あひう
そ。百の賣、わよ。まの買、わ有て。群集くじゆ」又云「町へん小庵をうけ。端國津。
この名わをねえ。賣買市をわると。或い見世棚をわまへ。唐土高桑
物。京堺の絹布をうるもゆり。云々」
新市きんいちの棚たなをわまると。ととと
詫ぎよめあかりみ。〔続狂言記〕狂言記卷四 河原新市と云。狂言より。河原新市をぞ。まつり。うらやまふと。そん。中畠。まつり。わざに。うれせど。うらやましきをと
まきよ」と。われば。そとものまつり。を傷いたよあひだ。

貞徳文集

セ棚のうあを考へたりべ。

大本抄

○虫のたれ絹十六

夫木抄 九の巻
夏郎三 正三位季能卿 夏草の哥小
草あくもひのたれうぬ結びへむげととあうりからよ夏の旅人
此哥のひのたれまうぬいま本抄のうちられ難義の一つきり。
詩林拾葉 卷三より右の哥を注ぐて云 蛇のきあきたらを虫の垂絹と云也。夏
行旅人草中れをひそびせりありとひきあうべ」と云ふひがことあり。

大本抄

九の巻
夏部三
正三位季能

詩林拾葉

井空集
四の春のもの
右の夫木の
哥を舉て
虫の垂縮
蛇のきぬ
ねだまし
かとゆく
謂林捨葉
とひづれり
えんみす
えんやまち

異名分類抄 もくじ
蛇ひねりけがの異名 いのちのたれまぬを。
もくじに記載するふや。卷二より。

○醒案もるよじめにたれましぬとひるめひらの絹を笠よねひつりたるを
頭より身よあらひて。山蜘蛛をやくに蛭えどをさりん料よやあくそのもゑふ
虫の垂絹ともいづる。古画よ所見あふうり。下ふりぞやる古圖をうえて。夫木の
哥のむを考へ蛇のきぬよゆうざるをあくべー。又

道中の車をひづる所よ云ふ。ふるのワタリよや。あめとまもひのゆうよ。まもらも
えさうわぬことのあり。うるがけふまん所の。京よりであまたとひて。トモよ。あ
ともありぬ。とくひひらざとえたり。わざに。びたられたら。もと。あうりやみえ
ん。ふきをうき。も家うちけあきととあうと。うきとば。たの。どん。
でも。ひかげぬ。そらの。あきやうり。云々。と。よ。い。うれたら。もと。雨き。や。見え。ぐん。と
おの。をうえ。うそ。それとくよえ。うけられ。うそ。うれい。小。大。進。う。る。ゆ。の。ね。ね
も。ひかげぬ。うれら。よ。うそ。考。よ。れい。虫。の。なれ。ま。り。う。り。う。れ。う。れ。う。れ。う。れ。

物の部	象文也
一木シウと音を 繰の字右の二書 すめれば誤字ともいひづれどされど	訓文
慧琳音義	正字通
龍龕手鑑	康熙字典
字彙	品字箋
玉篇	和玉篇
等を搜索されど、ええざれど、字類妙よムシと訓ト	

山家集下
五言律詩
其一
山中何事
只可采蘋花
日暮北風急
更著南歸衣

○ 宝の垂絹の古圖

垂絹の古圖

。男又尼きどもの
蒸氣あらわされだるきぬ
矣とみトク一住吉
さうりの笠い
ひ遣風み

諸國車中行事大成 卷五
京師に至りては、その行動のうち
よりして之を



輪鼓

十七

輪鼓ハソトアヨシ観具之倭名鈔四卷
二人諸雜藝之中弄輪鼓之者モノ
要皮而人倫專令絲一女以名之

卷雜藝具小云輪鼓本朝相撲記云輪鼓
二人也今案此物所出未詳但其形如細
新嘉樂記口玉論波正と云少石集卷

輪鼓ハソトアモニ覗具之倭名鈔四
二人諸雜藝之中弄輪鼓之者モノ
要波而論專於糸上故以名之

卷雜藝具小云輪鼓本朝相撲記云輪鼓
二人也今案此物所出未詳但其形如細
新嘉樂記口玉論波正と云少石集卷

月車而車輪が絶ニ古レ
蟻の内駆也の問答ふ
あふゆゑに蟻と
くびきて前後のかくちあるゆゑ
を蟻とづべく、輪子等とよ
野守鏡 永仁三年に上巻云々

機とあらわす。そのころいんと問。中ハ
かふ。識ともよと答。難ト云。前後あゆの
と云べし。とりよこと見えたり。こハ腰の腰乃
りをきく。輪鼓ふたとてまえあり。・
うごとはゆくと。圓鏡とゆくすと。其義
・ そのぎ

野守鏡

藝ゲイ之中ウチニロ覩ミ且シテ

之
体

腰鼓而輪轉於絲上故以名之

新猿樂記 品玉輪鼓八玉と云ひ沙石集五卷

腰鼓而輪轉於絲上故以名之

新猿樂記 品玉輪鼓八玉と云ひ沙石集五卷

うじとて、前後のかくわらあるゆゑ
を繰り返べく、輪子等とよび
野守鏡
永仁三年に上巻云々

か不識ともよと答。難して云。前後あるもの
と云べし。とりてことと見えり。こハ織の腰乃
りをきく。輪鼓ふたとくまより。ものさ
うごとはゆる。風情とくづすとくハ甚義
くませば。やと縄のくふうかとたちて。
もまたぬされふあけあくまば。ふく
くは心がせらまんとされば。詞のあ
くま事ゆる。云々

兵火事合云々條少云

爰ふ誰とハ不知。轎子引兩の笠筈付くる武者。

五十餘騎。云々

塙囊鈔

文安三年作

卷一第五十二條 小兒の玩物の中小輪子の名目

又輪鼓

たり同書

同卷第六十五條

幕紋の名目の中

小輪子又輪鼓

○これらを参考もす。伎藝も。つゝへねびふもりちひて。絵のうふまふせーある。り

アテマリーレン。その所為ハありぞ。そのからハ今的小のみの枕ふ似トマリ。

七十一番職人哥合の旗下の著物

伊呂波字類抄

林逸郎用

運歩色葉集

等や。輪鼓の名又えられバ近吉生でもり。

あそべるゆゑにこそある。

○子日比雑遊贋物の比比奈。十八

宇都保物語

卷の下ふ 太宮をまされむひて。正月二きめの子日。面白にあ

きふとひよひよする時。

ひのふねびふ。糸毛の車。又箇おけ。車を備おける

牛にひよせて。ひりあの人とのせ。金襷仕箇おける破子。又馬ふどちひよくは

うりて。その馬ふりのあせ人のせあうて。子日のねひのきぬとましげて。富士

とあくみあきい。車をまくり。今れきの女のつゝ。ちゆまくとあくみふ。ひり

あの人のかて。ひよりくよと。これが假り。ひよりくよと今もつゝねびハやく。

○國ゆうりの巻の下ふも。ひのかせひの事又ふれど。さのふとそりらー。

○つづふふ。詞花堂主人。うつわと考へた。王琴と云ふ。お手筋せり。わらじ。

○江家次第 卷十立大、子の條ふ。阿末加津ふあく。比比奈の名又えまく。

柴ぢうふ。こくにりる比比奈。今のが婢子のたぐひ。贋物の人物あえられ。ひ

あそびのふくらむ。ふくらむと。りふね。今世のまく。上己を期して。ひのかをりて。終す。慶長

以後のひりあふ。但し。ひのまき。ハラふ。日本紀通鑑

卷十下

日次記

上己離進。云々とある。黒川氏の。日本紀事のまくと。かげ。東見記

下巻ふ。

二百廿冊あり。日次記のまくと。あらひまくと。上己のひのねびの古きあく。お

あらひと。通説のかまき。まきまくと。かとう。かくなり。

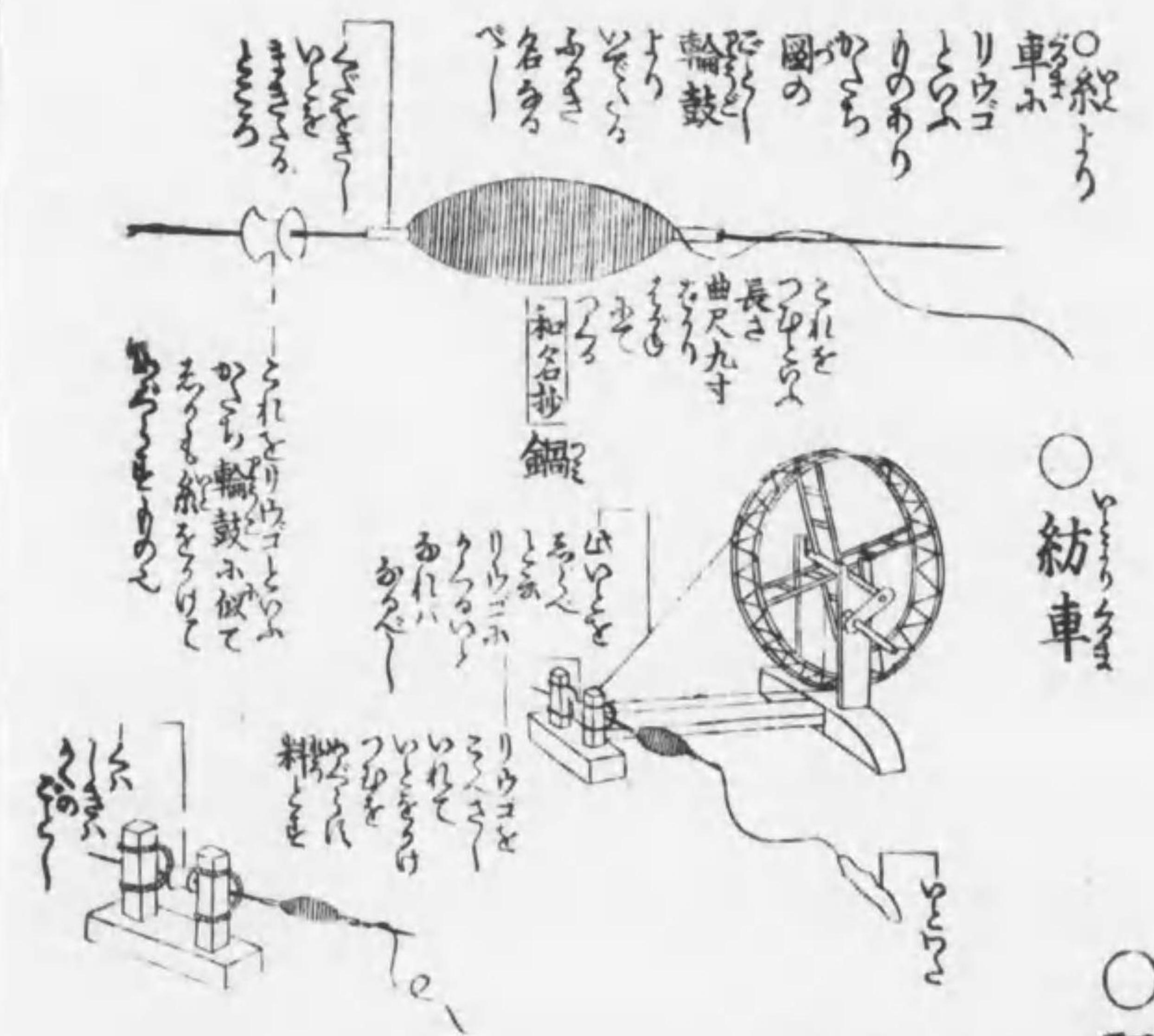
○海老上膳

十九

今づかのたゞねふ。眼の目を頭。紙の衣裳をきせ。ひりあたはく。海老上膳とそ
りあそぶ。これ寛文のまくと。あく。りざわや。寛文十二年の
詐譜三つねふ

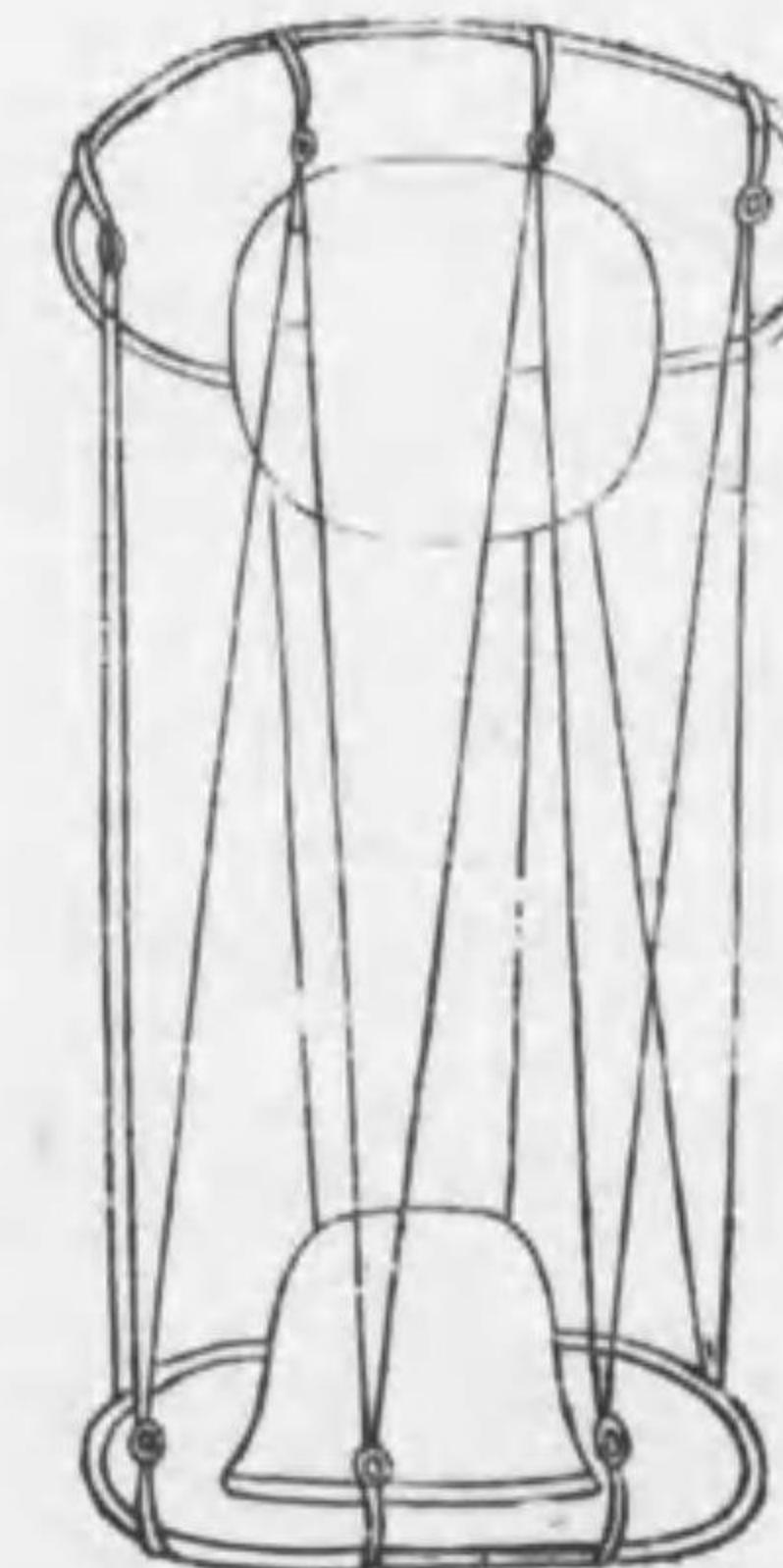
「うら白や海老上膳乃もとがまく。

正長



○紡車

○腰鼓圖
明の王城
卷三
墨用
三才圖會



東海道名所記卷四 あま 座駒。あま。
み宿の名物。たりうけやす。米と。ちのたま
のふうへ。あきふせうりと。やまと。あき
備を。あまの。小倉。え。あき。え。あまの。緒
ひそつと。あき。れ。倫。ま。乃。か。も。ん。
當。時。ま。で。あ。ま。う。と。わ。り。の。や。



○ 宽永のころの画中には
は函ありきもの 文様



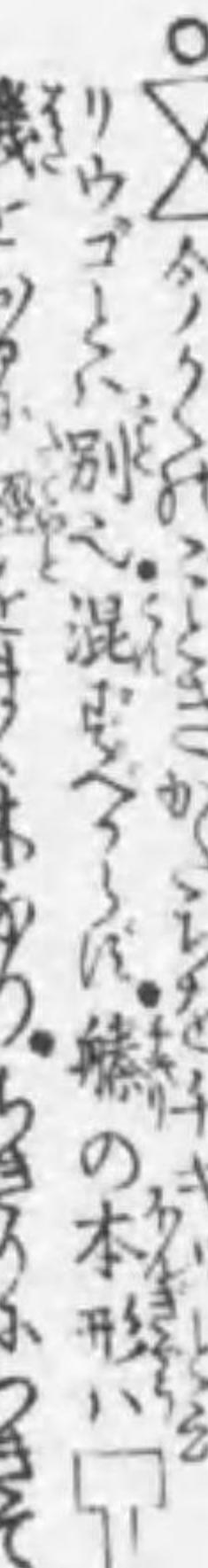
○かくもくの物、その名をあらわすと
りやく輪鼓をゆてあるよ。いふ
おあれたら承ちまへ。



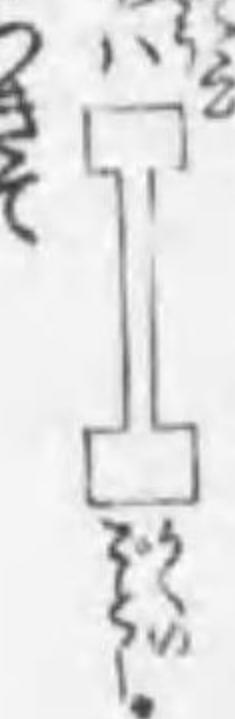
刀の柄ふ一種かねて
あるのくひとくは今もリウ。柄もよ



室町家のころより見聞諸家歴



考へ別ふある。中編小説集。



考へ別ふあり。中編小ひじまく。



かくしての物をその名を冠にせし
りやく端鼓をゆてあまよ。こどもに
ああられたり。或る人。

腰鼓兄弟。二十

豆腐田樂 豆腐
豆腐と壁ともことのわざきよ。先板の巻ひりづれど、
壁の引ひきをせまと
豆腐賣の月は哥ふくあまくはかべのとねえあら
舉七十一番職人哥合

ぬちろきく、月のそしけざりを 上鷦名事
ふ ぬちろきく、月のそしけざりを 下女房事
ふ ぬちろきく、月のそしけざりを 女房事
とあり。此記は東山殿のころの事と考へゆる事
右のあくびん哥合と書く事あり。
大永六年十二月の條云々 ある事
宗長手記 卷下 大永六年十二月の條云々

田樂をすうふの盃たびとてありて云々。【嘴のつり】もあれば。豆腐の田樂もある。さうあり。大永六年より今文化十年まで。凡二百八十八年也。○俗説云。豆腐皮とやがとゆい訛言あり。本名ハ豆腐皮也。其のち黄皮^きと號^{よひ}あるが。姥^おの面皮^{おもてひ}ふ似^そてゐる。その名あり。ともかくは豆腐皮也。豆腐上物^{とうふのうぶつ}とあるこそ本名焉^{いは}れ。豆腐^{とうふ}とは豆腐^{とうふ}をさへて。ふうかひ^{ふうかひ}皮^はあるをぞ。あるいは^えん畧^{はり}て。とくにあらわす。音便^{おんびん}ふはりと獨^{ひとり}りて。うがらのうよりあらわる俗説^{ぞくせつ}あるべし。やがとゆいも。うとゆと横^{よこ}ふかくべ。もあらべ^{まわべ}き訛^{まじめ}るもあらべ。

舊約全書

延喜式卷四十一
彈正式云
凡金銀薄泥不得爲服用并雜器飾但五月
諸衛府甲冑之飾不在制限
の甲冑等ふ薄泥をりひられと云え
午の菖蒲の葉ふ
端内侍日記下
建長四年五月五日の條云
女

觀文
昌蒲
花

けうきあがむ。まく。牛の肉侍。

說文

卷五
○板風呂・湯錢・風呂屋。
まくろ 鮎風呂
二十三

今物語故風呂 ふある備ひまつり あらへまお小入こいり 事こと えりそり そめんと考す
か戸と める物もの とまゆまゆ 此物語このものがたり 信のぶ 實じき 銀臣ぎんじん 文治承久ぶみじゆうきゅう ののむれのむれ とむね
風呂ふろ とくよ多た あゆあゆ き率りつ とくよまくわまくわ ありやさん
○日蓮にちれん 御書錄ごしょろく 内うち 十九じゅうく 四條金吾よじょうきんご 小あゆこあゆ 书か ま
便びん の由ゆ 有あべべ 常つね 小湯こゆ 錢せん ざくざく とのああいい あんあん と有あべべ
文永三年ぶんえいさん 當時とうじ まやく 見見 湯ゆ 風呂ふろ ありあり 一い あくあく
太平記たいへいき 卷三さん 延祐五年えんゆうごとせん 乃の

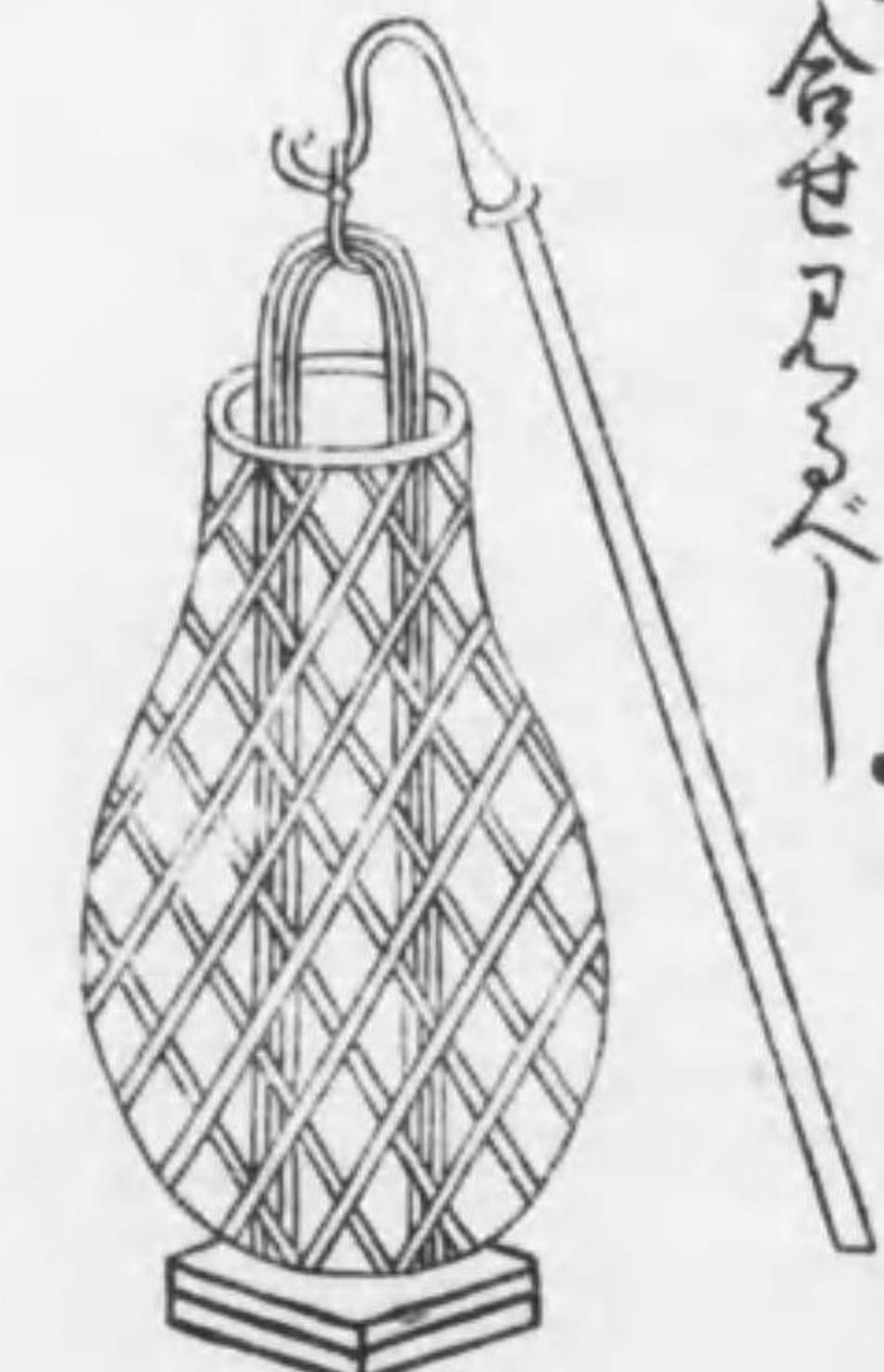
所ふ今度の乱ハ併畠山入道の所行也と落書あり。哥ゆ。讀湯屋風
呂の女童部までもきてあつひけど。されば京都の事となり。當時て
や京都の町小風呂屋ありて湯
女童部あり。——やうふまゆ。

○ 提燈再考

先板の巻小唐主なまかひらきゅうし
あらわる所おらわる所とされどちやうらん鞠まりの勢せいある火ほはこうびも
ののを外ほかののをの。惟ただくさき斗たたかひ也ゆ。

トあり。これハ筆ひちやうらんあとて。たき形かたち乃のうも。こねこねを先板の巻の提灯ひとうの條じょう。合せ又またべ。
一いっや。こねこねを先板の巻の提灯ひとうの條じょう。合せ又またべ。

暁あの玉塔ぎょくとう三才圖會さんさいとくゑ器用きよう
十二の巻まき小所すく載のり提灯ひとうあり。
先板の巻まき小所すく籠の籠の。先板の巻まき小所すく籠の籠の。
ちんちん。此か唐制とうせいののうにうけ
見る所おもぐき。



○行燈こうとう再考ざいこう [二十五]

行燈こうとうと提たずありく當あ小制せいする物もの。家内いえうちふきよおへ後のの事こととよ

證あてを又またりととあらへ山伏道葬さんぼくどうそう送行列次第そうれつれいじ

杏花園とうげいんとよ古いき書か小畧こはり

上次じょうじ尊そん

導師だうし先達せんたつ持檜もちひ・次馬つしま・次捧物しほくもの・次左右行燈ぎざうこうとう・次棺ぎかん云いふ

無縫雙紙むほうそうし卷まき四

左

宿茶しゆぢゃ毘び之の次第じだいとりる餘よ一いっ番ばん幡はた四流よりゅう右僧持うそうじ二に番ばん行こう灯とう四箇よつけ左行こう

右

者持しゃじ云いふ下しも累解脫物語るいげつぶつご

卷まき小この内うちのわわとより集つりてんと累るい解かい脫だつ物もの語ご

行こう灯とうととれ村中むらなか者じととも。福麻竹葦ふくまちくしと並居ながりととく。ととあり。是これ元もと禄ろく三年さんの御ご本ほん。そのころまでも田舍いなかへりとと行こう灯とうととけありきき。あく。

先板の巻まき小こ唐國とうこく風雲ふううんあらわく明あけの發句はつくと同時とき。合せ考かべ。

○ぎよたさうのちやうらんちやうらん乃の再考ざいこう [二十六]

先板の巻まき秋あきの夜長物語よぢょうものがたりを引ひて。ぎよたさうのちやうらんちやうらんとある魚綾うおあや乃の誤まち字じ綾あやととり。挑ひき灯とうととりととり。おおうあてせひづととみうき。古印こいん本ほんハきよたさうのちやうらんちやうらんと假名かなふかけとと。後あとふ古写本こしやほんととられ。魚腦うおののこ燈とうととり。それたたくらむ證あてあり。灯炉とうろととりて。挑ひき灯とうの證あてハあづあづととり。火ひべけとと。上う火ひりとと下し火ひりとと。かとと挑ひき灯とうとと灯炉とうろハひとひと物もの。古印こいん本ほん小こちやうらんちやうらんととある。後あとのさくらふはあくを極きわめ。○さて魚腦うおののこの挑ひき燈とうととり。唐國とうこくの魚綾うおあやの事こと。明あけの田汝成でんじゆ成が

○古画行灯挑灯

二十七

○らあへ挑灯と云ふ
はたゞひのものあつて

○されのみへ行灯と云ふあつまくる
たゞある。蓋て今茶人のゆうる
霧地あんどうよりのに古制の
のそむくこれあつてあつて



出售各色華燈。畧豪家富室則有料絲魚鰓。云々とある。巴魚鰓火

ハ豪富小あつざれば得か。且くあづれ高價のあつるべ。寶貨辨疑

百家

爾雅

卷釋魚の條下小魚枕の事詳之。本草綱目

卷四

魚鰓の條下小諸魚

ノ中ニ。收々タリ。小魚鰓を載て。價低きものハ成呂難得。とある。少てもありひやく。の脳骨と歎とひ。とあれば。古へ此小渡アモ。鰓火。此て魚脳の火。炉とも。挑火とも。とある。あく。外菴外集

河南通志

卷

十三

小云

青魚出濟源

江有青魚其

色正青云。枕如瓈珀。可以籠燈

林逸節用

器財門小

魚腦石之

桂川地藏記

弘治二年撰

上卷

此外魚腦

青魚出濟源

江有青魚其

形似鯉而背青色。又頭中骨煮拍之。可以製器

火。此のものもひふけられる。のすくん。琥珀の

わくわく。こののこそこそあらわ。秋の夜も。かくふらふらと。入りて。火ふかさる。と。わくわくする。

檻槐象牙引壺頗黎巣瑠璃壺

云々

とくづけり。もと。魚脳は

まわらわ
魚丸も寶貨あるよとあらぐ
ランモンク
ウキキヨヌテ ギヨナウゲンヌ

淮南子卷天文訓少

文訓小云

月虛而魚膾減

之消血成水此魚腦中有
之減多是也。魚鱉之別有
之減多是也。魚鱉之別有

石如某子

魚鰐あれ。ゆきと云。奥の頭ふ
る。たゞひふそ。墨ふほく。べきりのくわあくべ。
胡鬼板。胡鬼子。球杖再考。三十八

正月十一日、山野の方面の沙汰多くの像雲又今日比ノ
こまみニ向見、已下、ノ一様へも同おる又正月二

手鞠

今世正月女の口はれども手鞠のはづめ詳考
冠辭考卷七 理比
摩利菟玖波の注釋 ふ
是ふまねハ今もまうつてひふみよをと
りふへ古き世よりのことわざ也
天智紀みわくら跡まうへまれよもとある
上代久遠なりのことをわうつてり
うけり

古事記傳 卷十

もあつて、ちよきむす。寛永正保のころの繪本。四人立ひてまわる歌つてある。
をわけり。下ゆる者と見るべし。今も田舎者へ正月五人十人、まわるひてまわる。
あれ古俗の残れるやうん。東かみ東かみ小。ま勒まく會とあるもそれ小符合せるがごとく。又今ま
まうをはさんだひふまよとわざるハ。ゆと一二よりひどる。つまうき。まうまう
まうのものとせむ。冠辭考の説へとふくにうけねど。

許して立有物あり。云々

翼の方より飛つる。まことに
かくさうりをあはなよてりけれ。當時くわを
めりてあそびふ。

四月十二日若君
有二例辛鞠會

九三日の條雲
はるゆく
晴まゆりる辰
よりかくごえどもすうと
すてまゆせをせひふと
増鏡

增鏡



貞享四年ヨリ今文化七年ヲ
百代七九年ヲヘタリ

○天和貞享の比の雛人形三十

○天和貞享の比の離人
○眞面目とうつとんき園のごく
○井原西鶴が遺稿と元禄八年
印行せる恰好れくとひよりあり
四のまことに義女とのよきとあうけり。
そのよきはかづるふりもまたござ
そのよきのかづるにござる。



真賞圖



卷之二十一

此古制（まことの）佑久郡（さちひこぐん）の近（ちか）ふのとを今あはくる
とぞ質素（しそく）かしておのづこ古雅（ことうが）シ

○信濃羽子板

かくとうり作
地小胡粉
墨少てかくとう
くるひと見也
丹草の事

蘇材をども
りうとれ
りふる

の之出尺を

おもひへ
おもひへ

卷之三



— 5 —



松雲庵藏

○虫のたれ繩の追考

和哥分類 卷 衣の部 虫のたれ衣 御集

○打出小植追考

宇都保物語の卷上
俊薩波斯ササボスはゆりうり。河修羅カツラがあづかれる。宝のあとをもと
さとをりくトミク所トミ下アヌれあアヌきの上アヌ中アヌ下アヌ。かまみのカマミ大福徳カマミの本カマミあり。一ヒきんをむちて
むきムキきキわハたタくふ。一方恒カタハラ沙サのたタくタきキあり。づらふヅラフ似シまマ事モノ

追加。姫此節供。髪葛子節供。三十四

今伊勢桑名いせくわなりつむれ俗ぞくふ女童めのわらわれどもふ八月朔日と姫凡ひめぬかの節供せきぐうとぞ
ひら凡ひらぬかふ顔おほを画ゑびきづぶれりうとひろどりて頭かしら。けけ木けけき又竹たけの筒つばをとど承うけ
とく紙かみ又絹きぬかどひ衣服きぬをまかそ。ひのふ人形にんぎやうふぼく。棚たなふす多おほ酒さけ赤飯あかめしもどとそ
あそきる。又九月九日とひづくの節供せきぐうとぞ。ひのふ草くさはまとちひまく
男女の頭かしらとぼく。これも棚たなゆきま。おひだりごとくねをきてまつると。前まへも
ひよことく。凡ひらぬかは新あらわきく事ことハ清少納言きよすなげん言いひ草くさはひ事ことハ
源三佐頼政卿みなみさとよりの父ちち源仲正みなみが哥あねによられべいとく。あよき事こと多多く。按あてふ。これら
はひみひみ質朴しつぼくかうへきふ。天兒母子あめのこなどれ畧儀はりぎと。贋物あふもののうろづくそ
まほまほ。古俗いわゆるのたゞうあまぶ。上已じょうひのひりあひ。うきもくもつあふ似おなじぞ。
○和名沙わなをコスふ。今のかり。と古いわゆるへかづらとりそば。かづらとの節供せきぐうと云いも。ふきまくともくか
らす。後のひりあひ。此かづらすの繩くわのうくわすめや。江戸えどらき地じゆくも。ひのふ草くさつまそ。ひのふつまそ。もれど。ねをまくそまつる。すハせん。
○此事ことハ伊勢の桑名いせくわなの公翁麻呂まろの伊勢の桑名いせくわなの公翁麻呂まろのゆきまく。

○和名抄をうるま今のかか。と古へかくらとひれば。かづきの節供とも云も。かづきもあへず
らす。後のひづき。此かづきのみ繋ぎのうづりあれば。手や。江戸ちづき地あても
ひづき草つゝも。ひづきあつてゐる。もれど。わきあそまつる。ハセバ。
○此事は伊勢の桑名の公羽麻呂ゆのゆきうちひをせり。此巻をかまえ。

たるかのうなまふと。つめの質素のあらはさまきのあれば。ひまつ考をくらむ
かきのせり。前の佛よ含せろ。

攝陽郡談 卷十六

○八月朔日 姫夙雑圖

住吉郡遠里小野の田圃たけい小作り。
所そは市店いちてんに出で。鶴ハ堺道さかいみち
あり。大き鶴の卵たんのごとく。色いろ
画ゑがき。幼童おさなこの顔おほ。あひだに
黄き色いろある。黄き白しらもふ
美麗びれい。そろわれて、艶えんき形かたちを
以もて号ごうす。とりへり。此書ハ
元禄十四年印行せり。
うねくもそのうちある。
ひめうらみひいきをしてある。
くる鶴つる。前まへのひめうらみくらふ。
引ひりせんべ。竿いざなのほのぞに
くふ筆ひ。

○桑名くわなひのふ草くさを
かづく草くさと
りやを

伊勢桑名

翁麻呂寫真



○九月九日 髮葛子圖



○中編前帙二卷標目

- 宿むとひの考 ○唐土の鞬子けんしハ此の鞬子けんしに似おほる事 ○魚とうとの再考
- きうと灯籠とうろうの考 ○獨樂ひとりごの考 同古圖こづ
- 古圖こづ ○編笠ひらきの考古圖こづ ○端午たんごかぐり花まどか五月ごまつこの考 同古圖こづ
- 宗任ゆきなゲ梅花うめの哥おの考 ○朝裏あさり名なゲ鶴つるの紋もんの考 ○藤とうの考 ○編木摺門說ひんぼくずきもんせつ經きょうの考 同古圖こづ ○放下僧げきそうこまくらこあやめとあや竹たけの考 同古圖こづ ○千駄櫛せんぢくしの商人的きわめいの古圖こづ ○せんド物賣ものうりの考 同古圖こづ ○茶筅髮ちげんぱ・三里紙さんりしの考 ○女めの髪ぱの風古圖こづ ○もんド物并ともふ文字入もじいりの文様もんやうの考古圖こづ ○目黒めぐろのうち花うちばなの再考 ○ひーと和わどう。ひふ ○棚機たなまきの牛馬うまい ○屁へかひ比丘尼ひくに ○踊おどの古圖こづ ○蠟燭ろう ○若衆わかしゆ哥お舞妓ぶぎの古圖こづ ○皿屋敷さらやしきの考 ○手管てびらと之の詞こと ○枕久塚くしときづかの考 同青進せいしん水鑑すいがんの圖ず ○祇園きいん梶女かじめのの肖像しょぞう ○友禪染ゆうぜんそめの考 教きょう此外ほかあるとある。

追加 望 千向
たゞ。これももう少しあり打の一徳ともいへ。説譜家譜
没せり。行年八十三よりき。それから天文十九年の生れ。いまどうあり打のなまづの時をひべ。此外
うるより打成。怨恨のとくにせらるゝ。あるきのふあることある。あげてかまふべく。又寛永十八年。帆亭
徳元が著せる説譜初学者。鳥の裡ふうのあり打をひきせり。説譜家譜
びくに坂法すもかけらる時鳥松山跡世とあり。さればこの経とまをりくら々。おお湯ハ寛文五年の譜也
これらを龍のそれの条ふ含せり。

江戸 醒齋老人著 京傳

備書

同 凡例目六下之卷末自
升四紙至卅六紙

藍庭林信

刷人

島岡長盈

名古屋治平

朝倉吉次郎

加減朱子讀書九 一包
一文五合。生まれつきよろしく多病の人男。老若男女ふ等しくあらわしを
はいをめつて心をつぶ人があつて、病を生じて天晝をとるよもやく生を用て寝起を
・筋がふたりて益多。・うる。・海のあら・あら・一筋そ即興ゆ。江戸京橋南
印貢下篆刻。・玉石銅印古体近体ゆくらふ鷹を。・らふ石上刻一字
印文七字。白文五字大印ハ此限す。

東京神田區神田雉子町
三十壹番地
書肆 寛裕舎

名書林

終

